

## 乾癬（かんせん）外来のご紹介

乾癬とは、白色の厚い皮（鱗屑-りんせつ）を付着した盛り上がりのある赤い皮疹（紅斑-こうはん）が頭部、体、肘・膝などの全身に分布する炎症性皮膚疾患のひとつです。日本人の0.1-0.5%ほど、200人から1000人に1人が乾癬を患っていると考えられています。乾癬の病気になる原因が全てわかっている訳ではありませんが、食事や喫煙などの生活環境や体質（乾癬には欧米人に多い）などの複数の要素が複雑に関連していると考えられています。乾癬の皮膚は通常に比べて10倍ほど速いスピードで皮膚表面の細胞が増えています。その結果、角化物が落ちやすい（いわゆるフケ）状態になり、「見た目のストレス」や「他人に見られるのが恥ずかしい」など生活の質にも大きく影響する病気です。慢性に経過しますが、決して他の方うつることはありません。乾癬では、皮膚症状が主体の尋常性乾癬（じんじょうせいかんせん）が最も多くみられますが、手指や腰、アキレス腱の関節の腫れや痛みをとまなう乾癬性関節炎（かんせんせいかんせつえん）の発症も乾癬の10-30%に起こります。ほかには全身の皮膚が赤くなってしまう乾癬性紅皮症（かんせんせいこうひしょう）や急な発熱や全身のむくみをおこす膿疱性乾癬（のうほうせいかんせん）という全身の体調に影響をあたえる乾癬もあります。

当科乾癬外来では、「日常生活を無理なく過ごせる乾癬治療」をモットーに、受診された方々のライフスタイルや希望に寄り添いながら、治療方針を決めております。乾癬の治療方法は外用療法（塗り薬）と生活改善を基本とし、症状が強い方には光線療法（特殊な波長領域の紫外線）や各種内服療法（飲み薬）、生物学的製剤治療（注射薬）を行っております。関節炎のある方は、当院整形外科と連携し、診断と治療にあたっております。また当科では、発売前の新しい薬などを病気を持っている方に使って頂いて効果を確認するための治験も、より効果の高いと考えられる生物学的製剤を中心に複数行っております。希望される方には治験に参加いただき、新しい薬の効果を実感頂いております。これらの治療を適切に選択することによって、ほぼ全ての方が乾癬の皮膚症状が見えなくなる状態にできる様になってきました。

その他、乾癬外来では乾癬類縁疾患（乾癬に似た症状や病気の変化をもつ疾患）として掌蹠膿疱症や稽留性肢端皮膚炎などの限局性膿疱性乾癬（げんきょくせいのうほうせいかんせん）群や、生物学的製剤を含めた治療が期待される化膿性汗腺炎（かのうせいかんせんえん）などの診療と治療も併せて行っております。限局性膿疱性乾癬群や化膿性汗腺炎をふくむ慢性膿皮症も慢性に経過し、皮膚の痛みなど日常生活に大きな影響を与えます。乾癬と同じように症状やライフスタイルに合わせて外用薬から生物学的製剤治療（注射薬）まで選択しながら、症状が治まることを目指しております。

新しい治療方法ふくめて詳しい情報をお知りになりたい方は、かかりつけ皮膚科医と相談の上、東北大学病院皮膚科に紹介・予約をとって頂いて受診下さい。血液検査などを含めて総合的に診察・検査を行い、治療方法を相談して参ります。